

第5章 高橋和巳と『邪宗門』②

元おやさと研究所長
井上 昭夫 Akio Inoue

第二節 国家と宗教の共同幻想

天理教は、終戦直後において中山正善二代真柱により「復元」が提唱されたが、高橋和巳の暗喩する戦前の「共同幻想」の倒錯性からの脱却に成功しているかどうかは、いまだに疑問である。達成された「復元」と、未完の「復元」の領域をただしく認識区分し、それをあきらかにして民主的に議論する知恵と勇気が、真の「練り合い」「談じ合い」の意味するところであるにもかかわらず、その実践がシステムとして「元一日の精神」にかえる教団改革刷新にむけられていないという批判もある。

いうまでもなく、吉本隆明と高橋和巳の二人は、60年安保闘争の学生たちのカリスマ的存在であった。高橋は『邪宗門』巻末の秋山駿との「私の文学を語る」というインタビュー(629頁)の中で、大学での友人が就職運動に奔走しはじめたころ、自分には将来設計とかいうことは全然なく、ほんとうに食い詰めていて、母親がある新興宗教(天理教)の信者だったから、私のそういうのめり込み型(内面の葛藤、その葛藤の起伏がおおきいことがそれ自体充実しているという心的状態)の精神を直してやろうという気もあったかも知れなかったが、「天理教の修養科」という固有名詞こそ出てはこないが、あきらかに9回の「別席」とよばれる信者(ようぼく)の資格があたえられる講話も聴いている。そのときの天理での修行・研究のようすは次号において紹介するが、秋山との対談で高橋はつぎのように告白している

「大学を出ても何も仕事もないものですから、たまたまその教団で教祖の編纂事業みたいなものをやっているわけです。雑誌も出していましたし、多分そういう仕事に予定されたんでしょう、そこへ行けといわれましてね。ただ宗教団体なものですから無条件で仕事に参加できるわけではなく、教義の講義を受け信徒ないしは信徒なみの認定を受けなければならないわけですね。それでその講義を受けに行った(中略)。あれは九回講演を受けて、その教義を飲み込んで試験のようなものを受け、さらに一定期間の共同生活と奉仕をすませますと、資格が与えられるわけです。」と紹介した後、天理教教理について、「教義は割合合理化されておりまして、天地創造からはじまる教典にもそうおかしいところはなく、何回か実にいろんな階層の人々が、実にいろんな悩みを背負ってきているその間にはさまって説教師の言うことを聞いているわけですけれども、あれは面白かったんだけど、ただ最後に独特の祈祷の形式がありまして、手踊りをしなければいけない。宗教ですから、理解だけではだめで祈りがなされなければ信徒ではない。信徒にならなければ就職はできない。これは何とこののですかね、どうしても踊れないのですよね。」と告白し、踊ろうとすると、「背中にだらだらと冷汗が流れてきて、単にはずかしいとか、そういうことではないのです。食っていくためにはある程度はずかしさみたいなものはかなぐり捨てなければならないことぐらいは知っています。」とつづけ、「このぐらいのことができると逆にやってやろうというような気もするのですが、とにかく、全身硬直みたいになって、どうしても体が動かないのですね。」というわけである。

しかし、なぜ全身硬直状態になったかを文章化するのが文学者としての役割ではないかというのがわたくしの疑問である。つまり、入信を拒否した高橋の論拠としてはきわめて軽薄な弁

解であると思われる。この疑問への回答は後に述べる彼の異例の究極的文学観にあるはずだ。

一方、高橋和巳が白川静の招きで立命館大学文学部の講師をしていた1963(昭和38)年、彼の受講生であり、高橋が京大助教授に招かれたのち同人誌の飲み友達でもあった高橋の下宿のそばに住む村井英雄は、その著『闇を抱きて—高橋和巳の晩年』(阿部出版)において高橋が反日共系の過激派と総称される全共闘系学生を1969(昭和44)年に支持表明し、京都大学文学部助教授を辞職した後の、彼の孤独と苦悩と病、そしてその酒豪ぶりや、執筆状況など、日常会話についてもくわしく紹介している。「論理の導くところ、いずこへなりとも行こうではないか」というプラトンの言葉をよく引用していたとも回想しているが、それは高橋が、思想的な敵対関係や人間関係が憎しみ合う状況に至っても、往來の礼儀を尊び、問題は論理的に対決すべきであるという信念を抱いていたからだろうというわけである。ある夜、風呂桶を手にのろのろとうつむき加減になにかをふかく考えながらせまい道を歩いている身長180センチもある高橋が、道端の電信柱にぶつかりかけて「あっ失礼」と電信柱を人とまちがえ、謝罪しているのを村井が目撃したなどというエピソードもある。

『邪宗門』の巻末に紹介されている秋山駿のインタビューのあとに、吉本の「新興宗教について」という論文が掲載されている。この16頁に及ぶ論考の大半は「元の理」の全文引用をふくめた、教祖論と「天理神」の吉本自身の解釈からなっており、このときは「注記」として論文の最後に追記されているように、すでに高橋は病床にあり、この書の出版後1年足らずして氏は没している。ということは、吉本は前出の『思想のアンソロジー』出版の30数年前には「おふでさき」をすでに読み込んでいたことになる。『邪宗門』のテーマの通奏低音となっている(新興宗教)・天理思想による歴史観と国家体制との関わりにおいてもその意義を的確に把握していたにちがいない。したがって、この吉本の巻末論文は『邪宗門』を評価する思想的根幹を示しているといえるだろう。くわえて、高橋の天理での身体的修行は頓挫したとしても、天理の教えの土俗的表現に隠された宗教思想的根源への思索は、教祖「ひながたの道」のさまざまな史実を知るにおよんで『邪宗門』という作品に活かされていたにちがいない。

『邪宗門』は、夫にも6人の子供たちにも叛かれ、半狂乱の彷徨の果てに一種の悟達の境地に達した下層農民出身の開祖・行徳さまによってはじめられた明治の土俗的な新興宗教、ひのもと救霊会を主題にした小説である。その発生から二代目教主行徳仁二郎の手腕による教団の整備と拡張、そして戦時下の大弾圧、くわえて敗戦期に「世なおし」を希求する三代目教主千葉潔に率いられた信徒たちの武装蜂起の結果による決定的壊滅という筋道をたどる教団史が小説の骨格である。その物語の骨格をおおう生命の臓器は、国家と宗教の関係性、「家父長制と家族制度の被害を集中的にひっかぶった下層民の母親だ」という女性の性と家からの解放、死の自由と自殺の黙認、男女の性関係における葛藤、親子兄弟姉妹・近親関係における不和と闘争に譬えられる。人間を破局までおいつめるこれら凶暴な諸情念の浄化は宗教にとって可能か、つまり宗教によるユートピアの実現にはいかなるハードルを越えなければならないかというのが作者高橋和巳の宗教論の主調低音になっている。